

五一

校著聞集

三

孤山

梅

吹雪

そつりほのぬり

浅

鬼

芭

むまが

書

人

まね

笑

文

夷

解



猿著聞集三

○春足あち御館ふ哥よむ事

阿波のくふ石井むらの遠藤春足ひゆうこーこづくふ乃
あくふくかくざどくも又よくとみたつあるとーむだのを
トめちう春のあんよううび。のぞくんとて何がーどのくすうのが
りぬけ殿ひといくうじのまちをこのくふひてげ日ゆたるまち
の人くふれつぐくゑへくへくさんあんくのとよとぞあふ
ごあくうやがてあんうくけるどくゑひて春口ゑあもくくわめ
ともよせあくうかくそかくこそよみひでうかくづく人の
中あああうが古学家あつて哥ひのやー(び)子あうどみどり(を)

著聞集三

又二ぞう家あつてくべ近てひことよき延ひるど。くふくふひくひ
ちうやじふけ日の題一首をとくえよキどーてくべそのくのあう
がひのくぞせくもひる春足ひくくふあつてはあくびひおわれ居
てこの日の題うみくぞ殿ひくく古ての近てひともか十首づくを詠
くくそまくくぞ殿ひくくかはよくうびあつてあくほく
らけをもくゑひくうもく春の日のヰギムギラザミをやがく
この日のえんむをもくわくう人くいひーうひのくあてうくみ
さうかのくとちかく殿ひくくろやまー紀広うなをみてけむを
もんのとくがふことをとくかくく人もあくう春足ひべぢ
かくうがくニ葉とかせうる

タナヨヘハコトをゆきまくらてそのふまでこひが行梅の花さゑおう
吹がどんよとふかうて春風のこゝそえあざやかすみわか梅が
とうだまめのわうせうをやがてくさぐわのこびてもくうく
家わかへたまへとどまへ

○未成一首の奇をニツムキミカラ事

播磨のくわ姫路の内海未成あるとをやんざる見ゆすく
わきこゑくらへんうくけふどくゑりくらむがぞのとく「く」
てひくとくぬうを居くらう。とぞうもあつてうよつひとひく
のりやじふ天下泰平國家安全とかをうをうをうをうをうをうを
を奇わせくよとあふせうをうをうをうをうをうをうをうをうをうを
をうをうをうをうをうをうをうをうをうをうをうをうをうをうをうをうを

ごとみく

モミシゲ代ハ「こう死まくわかや」かたの三やめのあくの「く」
をすうぐゆのとくふくをうぐ君モテ「く」ひてそをモテ「く」
の奇くうくをうくわせくよとぞあふせうをうをうをうをうをうを
こうちくむ「く」ど未成やがて上の「く」をみて

文字ふかへんのうにこそやでくされ天下泰平國家安全
とうだまめのうぐ君ス「く」あうだ「く」是をうくわせく
あぞさくべとぞ筆「く」うてそれわうゆの「く」をうく書そくれ
あらの「く」やまびくまびくとくべやまくまく
天 下 泰 平 國 家 安 全

君エふかへドサセうゑひてうくのうのうびてかくされ

○裏行通ひ小町のうきの事

○裏行通ひ小町のうごり事
えどうくごとの服部裏行何どものうちへやあられり
ふやうゆきの客人あるともかくさりやこの君もん屏風のうよひ
小町の画をりざされて深草の少将の九十九夜くよひしれ実
あつてもちもふらそもやあれとのゑひをむだるも居くるふ
人ぐわゆまふとぞうとぞいをむらう裏行ひとう何ともりこ
ゆのでとくをう何どどの服部へ何ともちりりくぞと。の

九十九夜さよひつゆ一九百

か一九
とくとてくいざく一葉坐あせされば殿とあからドナモ玉ひ

卷之三

卷之三

うへつひてかせうれども裏行ひとりへつひとく
えがおとをかのぐらむ。わあからそろだえみこ
そあくよたかのる

○後羽君ゆきの哥よむをさくり玉ひー事

えどあさづの六本木あわへてむらに猿羽の君の入行とゑひ
くる路みちありてあつ翁あんじゆうもんこへ小行こぎあそびをもんそぶのひとぐ
りりすまむらこじきくるをもん轎こしのうちむりむりとゑひてさまさせそ
その翁あおきのうごよどかうがて心ううきわくじゆとおがむ。とひ
てよもとがわせくむれいが人々かくと翁おきおうのみ翁おきそとえて今
くらべかうづるみづれいがもやくさればもかくざむからあやまち

ちづくやといふをば何あつてゐるかとせてもさうが
あへかこきみてござへりゆゑのえぬこゝれんのこげしき
あへる。ほんまにさしてのちあんやうじがくへておひてば奇のと
とくひとゑひとぞ

○西東仁必ず事

えど本所石原の西東西東ひと日わのふ行ふるや兩あう出け
かぐとくかくまあへとのそべ。そらのやどもてあゆまぐの男とも
ひくさをいふくえん西東がむかゑのせとをひことけじけり
あづの男がどうぞかへこそ泥のくすぶねうゑこびてあやま
ちとくひてやうへゑとひひへふとくろも紙とうで

まる着のと三

○四

もうゑのけくとくとくろとのぞひとるを西東もわどうだ。さ
みせそ。そこがきみのひくとくふすまくとてての紙とう
でくかのととこぐまそのどうわけざれとくろとのぞひとる
とぞへくわーたるゆゑうひの人こよそあまきやさーをかのくよ
とくみのかんじあへくう

○松年人の難をとくひー事

えど本所石原の成頬松年へ何子すれ人のこのめもくせさ
るよくとくらごくよくよめやうかのへてふくとく。ちかに
ひとの人がよくおほ人をとてよろづとのこみかわかひをうちれ
松年の家あうれ小を二里がやどをるんへとくらうとくろす

りあらすじうそを心ざめりとねぢけむるえせものぞあひける
と一ごろ柳やなぎの母おや見みをいのつてさていかく家いえもさうそ行ゆ
きうはえせの妻めかへしてこ女めのをこそかからひきをさうそと
こ女めの病やまいふかへてひづかまつた妻めをわちかどひもあらへの
ゑく巫女みこかへと人ひとをむとこうをかへておへよかへんとりかさへ
とそかへかへあらべに家いえをぞうびゆうおもドコモつむむに
家いえをぞうすれあ死人の今いまがへくろへすがあへ老おいざらふ父とうと
月つきの母おやみへひう妻めのさだのへくろへすくとひと
へくろちゆ小孝こごとへくろかへた世よへひととくと
くとくはあ死人のぬよへかのえせのやかめあだのうてそのへく

せうあらうそかへる一ミヌのとへぬつぶあ家居りゆみどをあてそのかへ
あせんともへとのあみをぞやうあをくうえせののはととむひ
ひへこのあ死人が家いえをとへてこ女めのをとくえせくもむひはうと
ひひがせくめうはあ死人の家いえみくらのつまへひもみうと
老おう親おやをめやへひひがへとかく日ひそのぐでこそくぬりむとひ
ひひがへのとくもひくとぞえせのひつむだくもむちかうゑ
くひひがへかへりへくとぞ今いまとてせんとぞくあせんとくへくへ
まかつて家いえをこそやすくせあくこみくとぞくへく父とう老おがけで
やくふへやへひひがへの母おやこれとがだうくもくへくの夜
つえふとがへとまのびりと柳やなぎのまかとけかまうとくにぐ子このま

うへのうへとかへりてへじへひかへ行ふやうへ大い
るる寺のやゑかおきてぞかへへんるのと見だかくかゆ
かへふかへりて來つ。ひよとあらわらがひやうへ
は母をださかせたかへくは夜うのえせのひやうへま
いもへきへりへりへりへりへりへりへりへりへりへり
家のひぐもむ見のひへヌをだへふとげる法師のりへあじふ
ええんといふかぞやんざくへあじふかへとげるえせのひ
きて何どやうあくとあにりると見法師つとりへ來ても死人
のふみかへとべへとぞひへうるえせのひもひうけぬことふ

ちあらどひあをひそかのせめとりへを法師りうるをひこよひく
ひこよひそをたまび二十六度のところがお行ぬ又のとーの今宵ま
でゆづからぬやなまくひよひのせめとこぎみくひくうえせめの
がゆくおさへつかひえせめの今ハセトイとごくくめうがものうち
みうもへてびとくとくべそつ法師みやうみせびつことぢて行を
袖ひくらかん僧ひくらかん僧ひくらかん僧ひくらかん僧
各へ何へうまくまくせまゆひつとくえを名へやくへんとりよふくと
りひもまくちてもくりづさんあを人ぶ家あ母のりづちへう行えをまく
をまくで北のうふ行えあを人ぶ家あ母のりづちへう行えをまく

さうしてかくはなづかへてあつたとび
とびてこゝのひだかくはかへるがゆがゆつのあへどか
をうかがひかへるかへるかへるかへるかへるかへるかへるかへる
うかへるかへるかへるかへるかへるかへるかへるかへるかへる
みちのからへてあへるかへるかへるかへるかへるかへる家
を行ひたとびのひだかへるかへるかへるかへるかへるかへる
くへるかへるかへるかへるかへるかへるかへるかへるかへるかへる
くへるかへるかへるかへるかへるかへるかへるかへるかへるかへる
轍かへるかへるかへるかへるかへるかへるかへるかへるかへるかへる
今へつてへかへるまことかへるまことかへるまことかへる
りへてまへるまことかへるまことかへるまことかへるまことかへる
まことかへるまことかへるまことかへるまことかへるまことかへる
まことかへるまことかへるまことかへるまことかへるまことかへる

かづぬれてこゝかへてかへてかへてかへてかへてかへて
まけ王ひ)かへてあへるかへてかへてかへてかへてかへて
うのせせかへてかへてかへてかへてかへてかへてかへて
かへてかへてかへてかへてかへてかへてかへてかへてかへて
あへて家をばへてかへてかへてかへてかへてかへてかへて
とせせ)又と女が病いのむかとやつるへ行つてしほうがうひ
とあもかへてもがえとへもへつてあへ人のかとおまへ
くほぐかへりふへへほがえかへてとりどあへ人かへ
こへてえひとととあへるをとくへりひへへくほぐかへんご
みへへうかへとあへるをとくへりひへへくほぐかへんご

日あらがどへてこと女がやよひもあらへ行はむだ人を日より
りとみるのちかある人のひくとて松年^{まつね}がござりと
ぞ。かへひゆう母のまちかへかきくとひがひゆひよ
松年^{まつね}とは母がこのゆゑすへす波てうのえせののと
あらむたん人が孝をかんじかのふくろそよる法師のかり
人のありと奉^{さむ}下力のかへせやうてかくこそかくへまかくへる
と松年^{まつね}のをあたんすやうてえせののかへば。ふくろく
のくわそやどくたゞぎだにえせののが妙見^{めうけん}をひのつうと
おなこ女がやまをとこととめふくらへかうへをかつてあ
びやうへ孝子^{こうし}のちのたうえとめあらへつた仁とやりさん

まる著のん三

〇八

智とやりさんさうと母が妙見^{めうけん}ふまうでひのくまへぐものひ
かくふとのくちかみてば松年^{まつね}ふあひくとくわかとけのくと
きこちくふるんあつう

○歌志久^く蛙^かと^とたけ^く事

ひ常陸のくふ麻生の里^{さと}ふ年賀幹直とりふ入あざる歌志久
とくみくらひくわうと紀庭のくさむくふ蛙のくくこゑもの
うなあふさじ引^ひあけと一居^ゐしてすくぬつやう水のそや
づるあしつを山のけとひふ風とふぐたぬるどむかへてうそや
をせとみたことをかくさむのくわくやうひくのうつることべ
しくとび来て様^きふのがつて歌志久^くがひざのゆくすくづくやう

太かゑのけだくばあめひてとくにまくはくすみのうへかと
のがつてくへどくまかうのあひだかへるあやへとくよるわどく
又くさの申へてひとつの鶴のかへりかくびへりて来てひと
ちんむくせんかうをせだどかよめのりととのかへりてかくひと
こくたうかくのうかへりてかへりてかくひとくらむかくひと
はへとかおとせしとくびそくはとむかのひとくとけむと
志見のふあかねはくはくとくとくとくとくとくとくとくと
館のむかへじかくわせとせとせとせとせとせとせとせと
くらむとくらむとくらむとくらむとくらむとくらむとくら
も又くぶ庭のくまむくとくまつはめうつゆととのこだく家小住

さる著ゆ三

九

友あるうがごとて何ともやうひのよれうりつを愛へつせば歎とも
又あひせざどやあひはうりつをもゑばコレ又うんぢとこうへば
えねぢ蛙アシをむことやとくらかへうばコレ又歎タヒをこううせんふ
行うかわくらるるねぢ蛙アシをこなべべくべコレ又歎タヒをこううせんふ
かのめあくべてもゑせざどへ歎タヒをとやかへうば昔ヨレあくちうひ
てとびうかへ歎タヒをくらうりつをなむことをとびうかへとく
かへへてのひきをぞうのくちゆとさうくとくべくおう居リ
やうてのどやうすまひのびつたぬのーがくふうつて。がち。かく
りでござ。さみが。蛙アシへるやあそとて。がのうそんまがーと
えんのうそくか。居リきてゆべよろみてゆく

わざの事でござりやうぢやうが、おまへはおどりで御の御子を
おひきとおみたれな。

○唐店山路小狸走來事

くもさうへりともかのひとがひよこたれを人あつてかへら
つまうけをひきぬのモザヌみどりやへげみてゆとむくへげ
き男ふみとせぐはげどふそそめうやとくやうひへキスレバ
さうで狩人さう铁炮（ひや）かとうの狸（アリ）をねくひくんとがとうる
りうう唐店月うげふさうへそつあとうかくりごつうおふ
かう人のうこみわぐんのちとめちとで狸のつとせらん
と二三び三びかくへ吟（ギン）ドうう狩人何とうもかひくん铁
炮（ヒヤ）うちうめがくわのくへぐうてひな狸（アリ）わべミをすや
さん今ハきこえどうくとせ唐店もせんみて山をとざつ
てかへらう

○歌志久古狸を殺せ一事

○歌志久古狸を殺せ一事
ひくちのふ麻生の里より小三里九里ばかりやへて七つ乃
ちゆゑあつ七ゆゑとさんひくう四方さうへとて廣野より
左右か大樹の松どもさうむらひやくあべがひ右かへつゞぎね
外山ひくつめつゝみてゑびけり波をなうてちさくせらせてけ
きりえがくつるへかくゑびけりうる人々のまちのむくかくひ
くる百里うひどくとれこむまくわゆるみくふ夜ねひとづむかく
おとわづくふ一丁をあつたをあてもあつさんりとくづくげるよ
女のとゞことがうりやくかみが身おりつゝ死きぬやくとも花や
きくる帶あじけみくむきびてあごちうくゆみつこねうだく

卷之三

三

さざめくのこゑへでやあぐたうぢかのこゑへそもとくわ
さるをやがいどもかくもまつてぬきはなみゆきのうせのうるさき
うやまゆのうりのまゆみゆの帶おびの花やだひすけでおさやまよ
えつるをこねむせひあやへとせざくあやへとまよるとべらふあ
あくとももむれきさむれと岱おほあまとこしゆれとかひことそ
かくふくまくのせえあがれととぞこの國くにの人のくづくま
をかそそのみくふの名ハ何とうひつととくを手賀てがうぢ
の人まつことくさ。アシタ日暮も歌主かし久かとあつみかとひく
のひあくへ

○無康孤子まどか一事

近江のくふ信樂るる雄椿葉康あつとたゆふ行んとてので
ちるこちのわど少てあつ女のきへりてりかにがつまつやつまつち
の姫^{ひめ}をもひひよあへせそつあゑふあくがまつるひこの
やどのやわふのこみかよまびむみざうまへひなふくあますへ今れ
宿命も不とくあやくもひもひもひどかぞろそくとゆひゆ。さ
ゑづく父^{おやぢ}をもひあくびたとやへもあくさむがおのせらう
ちかくひもてねづかく君^{きみ}とてもあひよあへせもんろのけとも
さゑりうみぞあんりのちきとへたまつすなむともふへるやへと
さゑりうみぞかくらやあうモアツみせとりひもひ葉康^{はや}てさゑが
今まくぐふうとあるうかとりひてその女のあくふつむとひ行ふれ

かゆれて大りゆるこちの北月のくこの御庭のちひさだ門、ゆう
ぞーのびりうたる女^{こじ}小石^{こいし}とうてつぶてひくすきとぞこちのうちよ
りのとくらりへた女房^{わらわまち}のいくとくうひて来てこゑくへとくめうひ
うらおだくみふとくに様^{えん}かのがう廊下^{らう}つこひへ、かくかく
りてよしらばそくばたのうとくゆへ、へんかくへてせんじをみが
をかうかくげつるとくみうあつあくべどる女の寺入^{てらい}あくともす。お
おしくつてスムシダ^{スムシダ}とーのかど二ハおかうみもあんじんとも
がくとくらうとくに姫^{ひめ}の錦^{やまと}のふとくふくつとひてあふ
うきかげゆてももし^うく葉康^{はや}をよへるかみりやをくらう
りぞくすとくとて引のゆくふのうじゆうすの、竜のうや

そかの後まへんあるひかて集康やまとへべらむてへちとせもかへて
あへゆつめのをじへへべらもふへ居つたる集康やまとが家
あはれあるべのづこみへ行く三日だからもかへりこだいをな
人おもどりてゐたるをあひつ。日が暮れ山の下へひあひつ
友ともうちもどりてひあひつ。日が暮れ山の下へひあひつ
巫女みこらがくわくわがむかしの山をさむへて山さんへあらべて
やへりかあらざるをうだかへてのち小こまか三十里だらうへぢ
といひのやがむきよすへあらへて人ひとへひだりてとあるひかへり
あらひだりと人ひとへひだりてびゆくらうひひめめかみかみされ
しきりあつたらそのことのやうをひそかくお姫君ひめごんのむごと

えてもやくの入いりみかづきを姫ひめへ日毎まい琴ことうるる香こうを
うれこゑに哥おとみ頌とき广琴ひろことのあそびえもひまわす
このへかへる呂洞賓りゅうとうひんが五十年の夢ゆめへののうとこもものひを
うれし翁きのわよ今いまいびじかじせよじあひのへとひかへつてとえことを
あくあとあひのうつてとひかへ山さんのやとうふねどりとがだりあり
そひねじてとひかへたものうちの古寺きをかほくとくられ
がかせらるたゞびつちびつと筆ふかへたうみどりやがつて。よ
のうをちへがへてうがくそひぐあるひうか

おどりうしるる子この雪ゆきかうみをてもあひるかゆだまむ
せんぐわう井いとくみつる哥おあり船ふねかねじてひまくひがくま

とあらへくもがむてその室の人かんじてかのりがまう
せんじゆうた

○玉繁夢ふて玉をえー事

のぞもの國山形の石川玉繁あるよだもひーろ死夢やくとぞ
そこの庭かぐさうの池のあつみるそむかちひさな橋をうけたり
ふ三月の五日だからのこるあつたのこえあつまへかのけのやうり
かまやうびじむるさせその上かまへむひつかへ居て書みどとう
でくわくわくわく。とだかうあつて日のうげ西かきぢむあつゑを風も
おどへくるつて行みぞ原地ふたすくわやうへと脳をやくら
おやへふるるをうげこよつう春くうさんじうらうためのこくら

あくべやこちてうちちかこーぬ玉へげおどりてて何でふ
うことへだむう君のめにせらるふみるをとくせんみひひとりくわ
ぞさへばとてあそりだるのこくへかとひて行む池の水を乞うけ
てのつかやへとむのひそぐひてくわくわくわくわく路あり
ゆゑへとくわくが大いある門あへとむかのうへてゑせう玉をつ
らゆくがむをちうだかへるとひのあつてモトのむことあらへ
べゑむかのうかあくび玉へげそべへさく見てよへてとくじと
のわくかねびへやのぬびとーのやど百のうへ五十ぢぞうぞうえ
くわくわくとあらへどるる公羽へくわゆのびる髪うちを
じーつじーせうてはくわくとひだらのぬみぞがだらへともひあづて

わくふうくあるのぢつとまつたか琵琶のおとせのゆゑうくち
かへまへ行ひたからせがまへてえらへまへせつたへせつま
つせつてつたとくわなまつたまへせつた
あはへけんりとうつから見姫君玉のふぞへりまへなかや紀
やうみゆきゆのひこせつたうだりふたをまへひ四つの猪を
もとあぐてどもまへうだ翁のりふものまつたこの地かじとつて
まんあぐてどもまへうだ翁のりふものまつたこの地かじとつて
まつたのうるがわかとて家のあつたかてもとからふくふみん
をもつととえてアセカサカモツツトツツツツツツツツツツツツ
ひだやこてのじうかわのをさざつゑひつる玉しげのとよごり
あわひかて身うちあせだるびくぬうてこそ居つてくま

さる著やん三

○十六

翁やびてへろむのとのびへりど見紙やるうの硯をくろそゑ
かでりでつ何ふやむのかべとて玉しげのとよがく。かく
きるやどお姫わらへび琵琶うづきてまじてまふかく人の庭へ
めももるからへのひばんへだくまくび國やへやもるみゆく
どもせんじをあひその中ふ一樹の松のそびやだらうがある其
うげやうまく月のたとえうげきまくまくまくを玉しげやを
ら筆ふでとて

風ふけぞ琵琶やもすとのまくまく松のこの間すゑゆる夕
月とうをとくうをとが翁のとよろこびひてかくらひくにほくに
そべりあひひととのこくへひとの玉をやへへたびきこり

ひやうひよみつらまやうかしと、
あたま
あたま
まお
ひやうけさせらるゝと、も見てのうきり、
公羽りで来あきびつて何
とうやまつせ玉ぞことくが、
羽モテてうれ草の玉とあまつせる
とうやまつせ玉一げくとくけゐをあくふかくへびうもひてうのくゑを
ひうれきてめぐらめくもありあつて、
うごの手をやうくみあつこちぬ
ゆん
門をひづるとひとへかとあたかぬ、
スミとばあやうだのうへみひぢ
まくじてこそあへてうきと池のやとくそびやだらう松の木
の間か夕月のうげのこのうて外ひゆべくもあらぬこがみへの
画うり又みすわりあつさむが何かうあくんとくとくとく夢のうち
あくじくへ玉あざあくさきてかとておどろた孤ふどのかど

さる著のん三

七

あーのゆゑとあくまどぐらあそべーくわがえりさつて
のちかへ何のともえりむことより地の名をとうづねの池
とひびきーを夢のうに橋とさんみづけたるところその玉
も今えやひめむちだぬとぞ其ぬへよりひあこさむるやうか

あらすじふみ

○真砂子夢中かうかく事
えど吉日あさづま小さどめう小島真砂子こじままさごの女めのわらわもろろえあつ
入いりてゐるべからぬへこひへあつてゐるよむことをこの
三番さんばんも又またよしと神かみをあぐやあぐややとけをひかへとくは翁おきな
あぐとのへそへそからりちだれだれゑかまうでやくおひくじ

さる著のん三

九

るがくじめぐう行を遠山の山をひがどりへ海の夕へ日め
もあやかのへりくふもあらふくべどあひひきとかひの
こゑのひがどとくもすやひねがんじ夢みつたひめふくをあり
くぬい夢ともへかびだいわだいへをひごくひがどかくう
べれことくはと見まつてばあへつる紙おののくつ何かう
あくとアマダガヘのまかかわくはくはくはくはくはく
こうのうぢやくらかあう月かみうあうのくやく
猿やかのせんぐやうかゆぐのうじゆうじゆうそう上
せうじだかうくさうがくくせうて四のくまくそくをあう
くまくとだかうかうがくくせうてひくまくまくまく

一ノ
らきバ

おもかげ
藝城かくば 萬物の
夫ちう人せやまくニ危

春曉

面白之あはれを三々くわ

書けよこし

桂葉閣のゆき毛

あり名

えしきの事成キヤヤア書なハ残きたくも小屋の赤ふむ
面白うお様の藝の泥だり、なぐさきたゞるつめ、長さよ

美醉
合